「デルプヽイ發掘に際し出土せる希臘碑文」
（「アリストテレス『ピュティア優勝者錄』とデルプヽイの碑文參照」）

アリストテレス「ピュティア優勝者錄」とデルプホイの碑文

粟野賴之祐

内容

一、アムプヒクテユオニア同盟會議のアリストテレス並びにカリステネス表彰碑文
二、アムプヒクテユオニア同盟とマケドニア王プヒリッポス二世
三、アリストテレスの「ピュティア優勝者錄」
四、デルプホイの碑文發掘とアリストテレスの最後

一、アムプヒクテユオニア同盟會議のアリストテレス并びにカリステネス表彰碑文

〔參考文獻〕
Homolle, P. T. Fouilles de Delphes. III, 1 1929, No. 400. (un ouvrage d'Aristote dans le temple de Delphes. BCH. XXII 1899, 260ff.)
Pomtow, H. Die neuen delphischen Inschriften und das Ehrendekret für Aristoteles. Berl. philol. Woch. 1899, 250ff.
Dittenberger, G. Sylloge inscriptionum graecarum.[3]. 1915, I No. 275.
Cf. E. Preuner, Ein delphisches Weehgeschenk. 1900, 37ff. W. Jaeger, Aristoteles, 1923, 374ft.

碑文年代、西紀前三三四—三三一年、書体ストイケドン、高さ〇・二五米、幅〇・二六米、厚さ〇・〇八米の大理石に刻された碑文、一八九五年六月三十日デルプホイ町二九一番パパイオアナウ氏の家の東南にある井中より發見さる、現デルプホイ美術館所藏目錄第二八二號。所揭寫眞はアテナ市アゴラ堀に從事せる畏友 M. Welker 博士の好意によつて送らる。原石面寫眞の發表はこれが初めてである。

〔本　文〕

1　[ν ου]νέ[καξαν πύνακ]
[α] τῶν ἀπ[ὸ Γωλίδα νεν]
ικκ[ότ]ων τὰ [Πυθόκλε]
καὶ τῶ ἐξ ἀρ[χῆς νικ]
5　ν ἀγῶνα κατασκ[ευασ]
σάντων, ἐπαινέ[σαι]
Ἀριστοτέλη κα[ὶ Κ]
αλ[λ]ισθένη καὶ [σ]
εφανῶσαι, ἀνα[θεῖν]
10　αὐ δὲ τὸν πύν[ακα τὸ]
ν ἐπιφ[ανὲς ἐν τῶι ἱε]
ρῶι με[τὰ τοῦ ἀγῶνος]
νον [ἐπ]ὶ τῆς λίθ[ου]
[ἀναγρ. ἀνατιθέντα δὲ]
15　[καὶ τὸ ἀργύριον τῶδε κατ]ά....]

〔譯　文〕

(a)　一—八……神にデルプホイ市參政官[1]……の時春（または秋）季會議、神聖委員テッサリアよりポリテスおよびニカシッポス、アレクサドンロス[2]とリアルケポリス……（以下神聖委員二十一記載の箇所）

(b)　一—八……神聖委員會議にて決議す、すなはちスタギラのニコマコスの子アリストテレス並びにオリュムトスのダモテイモスの子カリステネスはアムプヒクテュニア同會議の乞に應じて

(c)　一—六　協力して（ギュリダ）以來ピュティア祭に於ける優勝者及び最初よりの競技主宰者の表を編纂せり。七—一五　仍つてアリストテレス並びにカリステネスを表彰し戴冠すること、また財務官[4]をして本表を石碑面に

刻したるのち、社内に安置せしめること、本決議を斯く刻すべし……

（以下欠損）

原石面には(c)のみを留め、(a)(b)碑文は T. Homolle の復原せしもの。

〔註〕① T. Homolle の説ではデルプホイ參政官はルキノス（西紀前紀三四—三三三）パッロス（三三三—三三二）テオルトス（三三二—三三一）の何れかの時代と言ふ。

② 神聖委員は當時各團体より二名宛、合せて二十四名、マケドニアは王を以つて代表し、他の碑文から此時代派遣の神聖委員名が詳細に判つてゐる。それによるとプヒリッポス二世は毎期委員を變更し、アレクサンドロスは成るべく同一人を派してゐる。

③ 異讀 H. Pomtow「プホイボス」（アポロン）また S. Witkowski「双方に」として優勝者と主宰者を修飾するものと解してゐる。

④ 財務官をして本表を石碑面に刻した勘定書が發見せられてゐる、後項參照。

二、アムプヒクテュオニア同盟とマケドニア王プヒリッポス二世

デルプホイのアポロン神託とソクラテスの話、あるひはアポロンの子と傳へられたプラトンのこと、またはアリストテレスとデルプホイとの關係などを見、一方ギリシア精神史上に於けるデルプホイの地位を考へると頗る興味深いものがある。しかも極めて僅かより傳承されてゐないアリストテレスの傳記史料のうちにはデルプホイに關するもの比較的多く、これらの史料が傳へる内容を通じて人間アリストテレスに觸れるべき頗る重要なものがあると思ふ。

デルプホイのアポロンが純ヘラスの民族神であるか、もしくは先住民族より傳へられた神々の一に屬するか、または他より移住して來た神に過ぎないのであるかについては久しい間學界の論爭課題となつてゐたが、[1] 現在純ヘラスの民族神でないことは考古學上むしろ明白な事實といつてよ

い。しかしその何れの說を取るにしても、デルプホイにアポロン神域が設けられたのは西紀前九〇〇年頃よりあまり遠くない以前のことゝされてゐる。そして同盟團体として希臘本土では最も古い歷史を持つてゐるデルプホイのアムプヒクテュオニア同盟が結成せられたのは恰もその前後の出來事であらうとされてゐる。傳へられるところによると、古くからテルモピュレのアンテラに大地を象徵した豊饒の女神デメテルの祠があつたが、この女神を中心として毎年春秋二季に定期市が立つてゐた。やがて定期市に集る amhpiktiones「近くに住めるもの」なる希臘中部及び北部諸部族が同盟を結集したのである。そこで同盟の創立者として神秘的な神「アムプヒクテュオン」（全ヘラスと關係あるべく共同祖先ヘレンの兄弟デュカリオンの子となつてゐる）なる名稱が生れて來た。それが何時の頃か、デルプホイのアポロン神の勢力が增して來ると共に、この神と結合し、終に女神の存在は影を薄くし、これに代るアポロンを主神として神託及びピュティア祝祭アポロン祭祀を中心とする同盟團体となるに至つたのである。最初の條約では、二つの神域を維持若しくは守護して、ピュティア祝祭を施行することの外に、戰時同盟部族相互の間では、水道を切斷しないこと、並びに町を壞滅しないことなどがあつた。古典の傳へるところでは、これに參加した諸部族名に多くの相違があり、時代的變遷もあるが、最初は次の十二部族が擧げられてゐる。[2]

1　テッサリア
2　ベライボイ
3　マグネシア
4　プティオティア・アカハイア
5　ドロペス
6　マリア
7　アエニアネス
8　ロクリア
9　ドオリア（ドオリスの）
10　プホキア
11　ボイオティア
12　イオニア（エウボエアの）

このうち、3——7迄の六部族はテッサリアの覇權の及ぶ地位に置かれてゐたが、事實上テッサリアが同盟の盟主であつた。すなはち會議（シュネドリオン）には各部族から代表者一名を選し　各一票、表決權を持つことが出來たから、テッサリアは十二票中七票を自由にすることが出來た。こゝで注意して置くべきことは、これらの同盟結成の團体單位が、すべて部族であつて、末だ一つとして都市國家名を含んでゐない点である。言ひ換へると、これは同盟成立當時に於けるヘラスの社會狀勢を遺憾なく反映してゐるもので　都市がまだ主要な政治的構成單位と認められなかつた、所謂都市（シュノイキセス）聚落以前　あるひは部族制度中心時代に起つた出來事と考へることが出來る　しかるに、ヘラス民族は次の發展段階に入つて各地に幾多の都市國家（ポリス）社會を形成したのであるが　元來　こ　民族の特性とし　部族的差別觀念、地方的偏見極　て強く、そ　上各都市國家　政治的、經濟的若しくは社會的利害を異にするところから、相互に嫉視、反目し、そ　上　當時なほ古代に於ける都市國家國際間の交渉　慣　規定する習慣が發達してゐないことの爲、地方都市國家間の平時關係は和平・統一といふよりは、寧ろ敵對摩擦抗爭、すなはち、戰時狀態に置かれてゐたといふべきであつた。從つて、ヘラス民族は、今日の言葉で言ふならば、一民族として統一國民國家を形成すべきであるのに、小地方に分權して、相互に主權の絶對性を主張し、各自の「自由と自治」eleuthesia kai autonomia を唱へ、相尅を事としてゐたのである。この果しなく分裂抗爭して行く動向は、希臘都市國家國際間の anachia「統治するものなき」狀態を意味し、後年キュニケ學派の哲學者たちが主張したユートピア、都市國家社會の否定と相通ずるものがある。しかるに、デルプホイの神アポロンは、凡そかゝる動向と相反する存在の一つであつた。この聖城へのヘラス人の信仰を通じて全希臘民族が、嘗つては一血族であつた事實を喚起せしめ、殊に此地に於いて開催せられるプュティア祝祭は、他の三大國民祝祭（オリュムピア、ネメア、イストミア）と共に、それが例令、力弱い精神的紐帶に過ぎなかつたとしても、常に地方分權的「アナルキヒア」へ向ふヘラス人の心を、汎ヘラス的な觀念——同盟へ結びつける源泉

となつてゐたことは認めねばならぬ。

惟ふに汎ヘラス神としてのデルプホイのアポロンが實質的に重きをなすに至つたのは、西紀前五九〇年に起つた第一神聖戰爭以後のことである。戰爭の直接原因はプホキアのクリサがデルプホイへの參詣人に通行稅を課したことから始まり、そこでクリサの不當を擊つべき神聖戰爭が全ヘラスに喧傳せられ、結局テッサリアが主導的地位に立つてこれを平定したのであつた。爾後、デルプホイは、公式に神聖同盟の管理下に置かれ、從來八年目毎に擧げられてゐた、ピュティア祭を四年目毎に改め、一方同盟會議への代表者を部族毎に各一名宛增加し、各部族より二名の神聖委員を選出することゝした。但しイオニアの一票はアテナイに、またドォリスの一票はペロポネソスのドォリア人に附與せられた結果、その影響するところ全希臘に及び、全盟の地位は政治的にも甚しく强化せらるに至つたのである。また、名高いアポロンの神託を通して、デルプホイが希臘民族の植民活動時代、絕えずよき諮問機關として、地方的な特殊性を排して、その海外植民政策に公正且つ適切な指導をし、多くの成功ををさめた爲、遂に全ヘラスの良心であるかのごとき尊崇を歛めるに至つた。

しかるに、その後西紀前四世紀中頃以後に於けるアムプヒクテュオニア同盟の事情は、これと頗る趣きを異にし、ペロポネソス戰後凡一世紀間に亙るスパルタ、それにつゞくテェバイの制覇時代幷びにアテナイの第二海上同盟時代にあつて、デルプホイは屢々强力都市國家の政治的傀儡と墮するなど、甚しく本來の使命を失ふものがあつた。さて先に揭げた碑文は、こう言ふ事情のもとに發生した事件と關係があるのである。

すなはち、西紀前三五六年、テェバイはテッサリアを誘つて、アムプヒクテュオニア同盟會議を招集してプホキアがデルプホイの神殿領を侵害したといふ口實のもとに多額の賠償金を賦課した。テェバイの目的はプホキスの興隆を制し、且つ西方希臘の隣邦を突くことにあつたが、プホキスはかゝる不當な決議に肯せず、當時同盟から五〇〇タランタの賠償金を課せられてゐたスパルタ等の內援の下にデルプホイを侵し、アポロン神域を占領した。そこで同盟會

議はプホキアに對して宣戰を布告した爲、紀三五五年にはこうして第三神聖戰爭が初まつたのである。ところが、プホキア軍は、一方强國の內援がある上に、戰爭遂行財源としてデルプホイの神寶等を悉に荒掠して流用し、多くの傭兵を集めて善戰した爲、同盟軍の豫想を裏切つて頑强に抵抗し續けた。かくて時日のみ經過し、最早同盟軍の實力を以つてしては如何ともし難く、爰に同盟會議は一策を案じて、當時は北方に於いて新興の强國となつたマケドニアのプヒリッポス二世に援軍を覓めてこの難關を突破しようと試みたのである。

この招請を受けたプヒリッポスは、暫時北方にあるアテナイの勢力を驅逐するためカルキディケ諸都市を降し（盟主オリユントス市の破壞は西紀前三四八年）たのち、南下して疲弊せるプホキア軍を破り、神域を奪回することが出來た。かくて前後十一年間に亘る第三神聖戰爭は西紀前三四六年終局を結んだのである。そこで同盟會議は、この戰爭に於ける功により、プヒリッポス并びにその子孫に向つてアムプヒクテュオニア同盟への加入を許可し、その上從來プホキアが享有してゐた二名の神聖委員選出の權利を、同市より剝奪してこれを彼に附與した。更に、プホキア市は破壞し、住民は各村に分散せしめられ、デルプホイの神寶を賠償する意味で毎年六〇タランタをアポロンに對つて支拂はしめることになつた。また同三四六年ブウカティオス月七日（八月三十一日）より開催せられるピュティア祝祭に於いてプヒリッポスを最も榮譽ある司祭長の地位に就かしめる等あらゆる儀禮[5]を盡して彼の意を迎へることに努めた。

この時決議された碑文の斷片に曰く

「マケドニアのアミユンタスの子プヒリッポスに、彼並びにその子孫へ、國賓權、神託を伺ふ優先權、理事權、擁護者權、デルプホイと對等市民權、神使權、治外法權、一切の公役賃稅免除權（を附與す）すなはち彼はデルプホイに對して善行者なり、ダモクセノス巻政官、評議員アリストクラテス、アイスクリオンダス（……十字欠）アレイストン……」（西紀前三四六年、Ditt³. 221 B）

さて、プヒリッポスがアムプヒクテュオニ同盟に加盟し、實質的にその盟主となつたことは、彼にとつては將來ヘラス統一への確保すべき最も重要な地位を得たことであつた

が、二方ヘラスの精神史上からいふと明かに一つの時期を劃したといふことが出來る。この前後から既に古典希臘時代は新らしい希臘風文化時代へ移行したと思へるからである。元來マケドニア人は血統、言語、習俗、宗教等に於いて明かにヘラス民族の一翼であつたと考へられるのであるが、當時なほ原始社會の要素を多分に遺し、ヘラス文化圈の外にあつて教養なき粗野な北方の「異邦人（バルバロイ）」と見做されてゐた。このやうな野蠻人がこの日以來、神聖同盟の司祭長と仰がれ、合法的な手段によつてヘラス精神の守護者となり、ヘラス人と全く同等の資格を得ることになつたのである。言ひ換へると、次の時代の主潮なつたところの「ヘラス人とは生れつき等しきもの（血統）を亨け繼いでゐるといふよりは　寧ろ教養に於い　吾々と等　くあるも　を呼ばるべきである」[6]といふ命題に對つて歴史的事實を以つて答へたわけである。故に古典希臘を代表してゐるアテナイとスパルタはプヒリッポスの主宰する此年のピュティア祝祭に恒例の神使（テオロイ）の派遣を拒絶して、彼の地位に對し、暗默の不承認的意志表示をしたのであつた。そこでプヒリッポスはアテナイに人を派し、アムプヒクテュオニア同盟に於ける彼の新らしい地位を承認することの要求をなさしめた。しかるに、當時アテナイは北方に於いてプヒリッポスとの間に起つた植民地爭奪戰のために疲幣し、彼の提議を峻拒する氣力を失ひ、反マケドニア黨の首領デモステネスでさへも「デルプホイに於ける亡靈のためにいま戰に行くこと」の愚を說き、彼の要求を入れプヒロクラテス條約を條件として平和を守るの得策なることを主張した。また、同年にはこの和平條約と關聯して、アテナイの修辭學者イソクラテスが畢生の雄篇「プヒリッポスへ」を王に獻じ、アテナイ以下希臘都市國家間の平和を說き、全ヘラスの同盟軍を以つてペルシア討征の易々たる所以を進言したのであつた

さて、事實上アムプヒクテュオニア同盟の盟主となり、ヘラス精神の新らしい代表者となつたマケドニヤ王プヒリッポスが爾後この戰爭中プホキア人に荒掠されて荒廢したアポロン神域を修し、また戰時中一時中止狀態にあつた社殿建立の繼續事業に盡瘁したであらうことは推定に難くない。[7]

このことは近年デルプホイ　掘中發見された幾多の考古資料からも證し得るところである。彼の手によつて實際デルプホイに大規模な復舊事業を開始　たのは　なほこれより數年　後、そ　財源をなす北方金山地帶安定以後、アムプヒサ戰のため再度デルプホイに出陣した西紀前三三九年末[8]のことである。一方、社領、神殿、神寶等の修復[9]と同時に散逸したデルプホイの公文書の復舊がこの時問題となつたと思はれる。そこで同盟會議は、この公文書復舊事業を公式に當時マケドニヤ王宮と專ら關係の深い碩學アリストテレスに依囑したのであつた。H. Pomtow はこれをその翌年西紀前三三八年春季開催の同盟會議と考へてゐる。この會議にはプヒリッポス自ら出席してゐた事實と、共編者であるアリストテレスの甥カリステネスの年齢並びに碑文年代などを考慮に入れると、H. Pomtow の推定は正しいと見ねばならぬ。

王傳アリストテレスが同盟會議から「ピュティア優勝者錄」の編纂を依囑された事情にはプヒリッポスの推輓に負ふてゐることは想像に難くはないが、アリストテレスの甥カリステネスが彼の共編者となつたことについて H. Diels は次のやうに考へてゐる[10]。すなはち、哲學者自ら門下の逸才カリステネスを共編者たらしめるやう王に推擧したものであらうと　その理由となつたものはカリステネスが師の指導の下に、ミエザ學園以來新興マケドニヤの版圖擴張政策の線に沿つて、既に「ヘラス誌」「神聖戰爭」等テルプホイと關係の淺からぬ歷史書を著はしてゐることにあつたと思ふ。その上アリストテレスがプヒリッポスの意圖の下にデルプホイの公文書復舊に携はつたといふ事實は、この時より十三年後西紀前三二三年アレクサンドロス大王の死後反マケドニアのラミア戰端が開かれた時、こゝに掲げたアリストテレスの頌德碑文がマケドニアに阿諛するものへの記念碑であるといふ理由で同盟會議の決議によつて破棄せられた事實にその邊の事情を反映してゐる。

デルプホイとアリストテレスとの關係について、アリストテレスが、アカデメイア學園時代親しくし、のち、アッソスの君主となつて、彼をこの地に迎へて學園を開かしめ（西紀前三四六―三四四）たヘルミアスの非業な死（西紀前三四一）を悼み、デルプホイ神域にその像と「碑銘」を献上「德」（アレテ）の詩を作つたのは、

この前後のことではないかと思ふ。

その「碑銘」に曰く（Diog. Laer. V. 6）

「この人をいつの日か
怖ぢ戾（つつしみ）もなく聖なる掟を破りて
弓つかふペルシャ人の王は殺せり
血なまぐさき戰場の勝負にての
槍の種の立合にはあらで
信じたる人のよこしまなる企（たくらみ）をかりて」

この種の碑銘詩として、憎惡をあまり露骨に表現してゐるのは珍らしい例であり、韻律も快適でないことが指摘されてゐる。U. Wilamowitz, Aristoteles und Athen. II 403 ff.

「德の頌歌」の邦譯は田隆博士譯「アリストテレス篇」昭和十六年版三四五—三四六頁參照。

オリュントスのカリステネス（西紀前三七〇—三二七）アリストテレスの從姉を母とし、彼の薫陶を受く。師に從つてテオプラストスと共にミエザ學園にあつて研鑽をつみ、この間「ヘラス誌」「神聖戰爭」「ヘルミアス頌德論」等を著す。イソクラテスの汎ヘラス主義に影響されてゐることは留意に値す。アリストテレスの推擧により、アレクサンドロスの東征に從ひ、「宮廷日記」を管掌し、これを底本として「アレクサンドロス行傳」を書く。陣中王のアシア化に反對し、叛逆の罪に問はれ獄中沒す。

「註」① U. Wilamowitz, Hermes. 38, 1903. 575 ff., M. P. Nilsson, Griechische Feste, 1906, 162 f. F. Poulsen Delphische Studien, Apollon u. Asien, 1924. 2 ff. はアポロンが小アッアにて創められた祭神と考へ、デルプホイ發掘に從事した佛國の學者たちもこの說を支持、BCH. 1922. 508 ff., Ed. Meyer, Gesch. d. Alt. I₂ 639 ff., L. R. Farnell. Cults of Gr. States. 98 ff. 等はヘラスの民族神說を取つてゐる。

② Theopom. (F. Gr. Hist. 63), Aesch. 2, 116. Paus. X 8, 2. Dit.³ 230 ff.

③ 後項述べてゐるやうに第一神聖戰爭後各部族より神聖委員二名づゝ派遣となつてゐる。定例會議は春秋二季、春はデルプホイ曆第十、エンデュスポイツロピオス月（四—五月頃）秋は第四、ヘライオス月（十—十一月）に開催。

この外常設のデルプホイ市評議會、西紀前三六九年以後は神殿建築委員會等の補助機關があり共に、神殿維持、行政、祭事、神託保護、社領管理、市場統制を管掌してゐた。神聖委員の職務規定は Ditt. I² 1126 に委しい。

④ この神聖戰爭の史料についてはテオポンポス拔粹の Diod. XVI に依存し、西紀前三五〇—三四七年迄の經過について殆んど知るところがない。Paus. X. 2, Just. VIII 1—2. K. J. Beloch, Gr. Gesch. III₁, 1922, 234 ff. 2 1923, 262 ff.

⑤ Demosth. De Pace. 23; Diod. 59, 3. Athen. XIII. 591 b

(FHG. IV 295)

⑥ Isoc. Paneg. 50.

⑦ 西紀前三七一年より遠からざる以前アポロン神殿は大破した原因は震災若しくは火災ではなく、地下空洞の陥没と考へられてゐる。IG. II² 103. このため西紀前三六九年神殿建立委員會が新に組織され、各地より寄進を募つた。Ditt.³ 236 B. 241 B. プォキアの神聖戰爭の初めには工事を繼續してゐたが、中途から斷絶した。戰後プォキアの賠償金は主としてこれに充當、その委しい勘定碑文が發掘せられてゐる。それによると、西紀前三三八年以後は年額六〇タランタが六分ノ一に減額せられ、三二六年には終了してゐる。そして神殿の大部分は三二九年迄に完成してゐる。Ditt.³ 2.10.235.

⑧ 此の年の年代學上の問題は J. Beloch. op. cit. III 2. 2. 298.

デルプォイの修復が一大進捗を來したのは西紀前三三九年神殿委員會の外に財務委員會を新設して以來のことである。財務委員の職掌規定 (Ditt.³ 249) によると神聖委員とその數及び資格を等しくする。そして委員は各都市より選出、この委員會は寧ろピリッポスの代表機關と言ふべきである。

⑨ 此の時デルプォイの復舊に關し復舊費支拂のため新貨幣を鑄造してゐる。P. Gardner, Hist. of ancient coin. 1918. 363.

⑩ H. Diels, Die Olympinikenliste aus Oxyrhynchos. Hermes. 36. 1901. 72 ff.

⑪ Ael. v. h. XIV 1.

三、アリストテレスの「ピュティア優勝者錄」

さて、いま問題となることはアリストテレスとカリステネスが著はしたものは、如何なる書名で後世に傳承されてゐるのであるか、またその內容は如何なるものであつたか、そしてその制作年次は何時であるか等であるが、以下逐次これらの諸問題に觸れて見よう。この書はアレクサンドリアの學者たちに直接引用されてゐたが、西紀二世紀以後觸れた者の形跡がないところから、その頃散逸したものであらうと思はれる。

まづ書名について言ふと、現在傳承してゐるアリストテレスの三つの著作目錄表中二つがこれについて次のやうに採錄してゐる。

(一) デイオゲネス・ラエルテウス「哲學者傳」アリストテレス傳の終り Diog. Laert. V 22—27 にある表の底本となつてゐるナポリの寫本B、巴里の寫本P等には

第一三一書目 Puoionni kai Mousikes a (音樂篇ピュティア優勝者錄一卷)

第一三二書目　Puthikos a（ピュティア誌一卷）
第一三三書目　Puothionikon elegchoi a.（ピュティア優勝者錄考一卷）

これを異系統のフロレンス寫本によると第一三一書目は二卷に分冊せられ「ピュティア優勝者錄一卷、音樂篇一卷」となつてゐる。

（二）「（シュキヒオス）作「人名錄若しくは文學上著名なる作家」の斷片と考へられてゐる巴里メナギウス Aegdius Menagius 文庫中、所謂メナギウス本著者未詳（Anonymus Menagii）「アリストテレス傳及び著作目錄」には

第一二三書目 Pythionikas biblion a, en oi Mensichmon enikesen（ピュティア優勝者錄本一卷、その中にてメナイクフモン優勝す）

第一二四書目　Pepi Mousikes a（音樂篇一卷）

第一二五書目　elegchon sophistikon e Pepi epistikon [a]（ソフヒスト論考誌あるびは論爭誌一卷）

更にミランの寫本A及パトモスの寫本aには第一二三書目は「ピュティア優勝者錄」が逸脫して單に「本」とのみなつてゐる。

第三の著作目錄といはれるものは、アレクサンドリアのプラトン學徒プトレマイオス・クフセノス（西紀二―三世紀）の著はした「アリストテレス傳并びに著作目錄」が、今日原本は逸余して、アラビア譯本のみとなつて傳承されてゐる。プトレマイオスはアンドロニコスの著書を底本にしたものであらうとされてゐるが、この表の中には「ピュティア優勝者錄」に關するものは採錄せられてゐないから、史料としてこゝでは問題にならない。

そこで、以上掲げた二つの著作目錄から V. Rose は、ディオゲネス・ラエルテウスの表を

第一三一書目　ピュティオ優勝者錄　一卷
〃一三二〃　音樂〔篇〕　一卷
〃一三三〃　ピュティア誌　一卷

といふやうに復原してゐるが、現在大多數の學者の同意を得てゐるところである。(1)

次に內容の問題について、同じ V. Rose 等の斷片集に從つて集錄して見ると、

「アリストテレス『ピュティア優勝者錄』斷片集」

（史料1）前掲碑文c「—六行

「ギュリダ以來ピュティア祭に於ける優勝者及び競技主宰者の表（ピナックス）を編纂せり」

（史料2）Plut. Sol. 11 (Rose, frg. 615; Heitz, frg. 611; FHG. II 181, 265)

「いまや、これらの故にソロンは尊崇せられ且つ勢力を得た、特にヘラス人の間に多大の驚嘆と人望を克ち得た。すなはち彼はデルプホイの神殿のために援助が必要なること、キライア人が神託所を荒掠するのを忽にすべからざること、これに反してデルプホイの神を守護すべきを勸説した。そこで彼の主張によつてアムプヒクテユオニア同盟は戰に動員したのである。このことは多くの人が確認してゐるが、アリストテレスも『ピュティア優勝者錄（アナグラフェ）』中ソロンがこの意見を提案したといつてゐる」

（史料3）Hesych. lex. [Herodian. P. 429.] (Rose, 616; Heitz. 612; FHG II 181, 265a)

「プウトス放浪す、愚かしく思慮なきものたちに就いての格言、ピュティア祭に優勝したあるプウトスより由來す、アリストテレスは彼が優勝したことを記錄してゐる」(Zenob. Prov. 2. 66, Plut. Prov. 1, 33)「プウトス放浪す、クラティノスは『ケヘロン』の中で此れを記してゐる。愚かしく思慮なきものに關して述べられたもの、あるピュティア優勝者プウトスより由來す」

アリストテレス「ピュティア優勝者錄」とデルプホイの碑文

(Herodian. Peri mon. lex. P. 42, 9)「プウトスピュティア祭に優勝せり、諺にプウトス放浪す」Cf. Suid. s. v., Macar. Prov. 1. 81.

（史料4）Schol. in Pind. Isth. 2 inscr. (Rose 617. Heitz 613, FHG II 181 265 b)

「アクラガスのクセノクラテスに、この優勝の詩はアクラガスのクセノクラテスの讃まれのため書かれたり。……古の註釋者たちは實際はテロンの兄弟であつたといふ。但しシケリア人について詳細に書いたアルテモンは、彼は單に一族の一人であつたと述べてゐる。更にこのクセノクラテスはイストミア祭に於いて競馬で優勝したのみならず、アリストテレスの記錄するところによるとなほ第二十四回のピュティア祭にも優勝した。シモニデスは彼を讃えて同時に彼の双方に於ける優勝を語つてゐる。(Schol. Pind. Olym. 2, 37.)

「彼（テロン）はこれのみならず、オリュムピア祭にも受賞したのである。クセノクラテスはピュティア祭とイストミア祭に、アリストテレスの記錄ではピュティア祭の優賞者はテロンのみを記載してゐる」(Schol. Pind. Pyth. 6 inscr.)

「アクラガスのクセノクラテスに、第二十四回ピュティア祭に優勝せるアクラガスのクセノクラテスのために書かれたり」

（史料5）[Hesych.] (Rose P. 15)

「第一二三書目ピュティア優勝者本一卷 そのうちにメナイク

モス優勝せり」

以上が凡そアリストテレスの著はした「ピュティア優勝者錄」に關する現在の全斷片である。これらの斷片集が傳へるところは（史料1及び5）を除き、運動競技出場者に關するもの許りである。元來ピュティア祭の競技は初めデルプホイ人に制定された時は、竪琴（キタラ）に合せて誦ふアポロン讃歌のみであつた。[2] それがアムプヒクティオニア同盟の手に管理されるやうになつたのは第一神聖戰爭の直後、テッネサリアのエウリュロコホスが主したピュティア競技祭のことである。この時竪琴（キタラ）の外に笛に合せて唱ふ歌謠及笛の競技も加へられたが、一方オリュムピア祭と同じく、四頭立戰車競走を除く、すべての運動競技種目が加へられた。また、この時競技法を制定し、賞品として戰利品、貨幣を提供したとある。しかるに、次回のピュティア祭より各競技の賞品には月桂冠を出すことに改め、笛に合せて唱ふ歌謠を廢止した。[3] そこで碑文がいふ「優勝者及び初めよりの競技主宰者の表」の中にある優勝者の意味には、一般の運動、音樂兩競技を含んでゐるものと解すべきある。また、他のデルプホイ勘定書碑文でも總稱して「ピュティア優勝者の刻文に」とあつて、兩方を分離した形迹は全然見當らない。

すると V. Rose の復原した「第一三二書目音樂篇一卷」が問題となるが、（一）著作目錄（デイオゲネス・ラエルテウス）第一一六書目同じく（二）著作目錄（ヘシュキヒオス）第一〇四書目にも全く同名の著書があるから、これを單なる「音樂篇」とは考へ難いのである。寧ろ、これはデルプホイと關係の深いアポロン讃歌ピュティア調（ノモス）等を集錄した書目ではなからうかと思ふ。

殘るところは「ピュティア誌」一卷であるが（史料5）に記載のメナイクモスが「ピュティア誌」を編したことが判つてゐる。ところで、この斷片の但書には二つの異つた解釋がある。F. Susemihl[4] はそれをメナイクモスが彼の著「ピュティア誌」の中で述べた誇示と解釋する。H. Diels はこれはメナイクモスの書を參考した「ヘスキヒオス」の書入れであると見てゐる。但し、この二人の學者が一致した意見では、メナイクモス[5]の著はした「ピュティア誌」は、アリストテレスの同樣の書「ピュティア誌」を底本とした

ものであらうといふことである。幸ひピンダロスの註釋書にはこのメナイクモスが著はした「ピュティア誌」を引用して彈唱詩人オルプヘウスの傳說を述べてゐるのである。そこで、アリストテレスの「ピュティア誌」の內容であるが、これから推定してピュティア祭成立事情、祭祀の起源等を集錄したものと思はれる。

すると、アリストテレスの「ピュティア優勝者錄」は何時を起點として書かれてゐるのであるか。また制作年代は何時であるかゞ問はれる。碑文の復文箇所に「ギュリダ以來」とあつた。これを「プホイボス」(光るもの)と見ない理由は、かかる問題は前述の通り「プュティア誌」の中で取扱つたと思はれ こゝ、一つはギュリダ以前はデルプホイの歇史時代と考へられるところより、この復文は正しいと思れる。ところが、ギュリダの年立の前後は、希臘史學上最も難解な一つとされてゐるが、ピンダロスの註釋書[6]に

「キライアを征服したのち、テッサリア人エウリュコホスはアムプヒクテュオニア人と共に神の(ピュティア)競技會を開催した。……その時デルプホイの參政官ギュリダ、アテナイの參政官シモン」

これに「パロス年代錄[7]」の記事を補すると更に明かになる。

(第三七行)「アムプヒクテュオニア人はキュラスに戰勝したれば祭典を擧げ、運動競技を催したが、賞品に戰利品を配した。その時より三百二十七年(西紀前五九一——〇)アテナイの參政官シモン」

(第二八行)デルプホイにて月桂冠の競技會再度擧行せられより三百十八年(西紀前五八二—一)アテナイにてダマシアス第二回目の參政官(パロス年代錄の書かれた基準年次は西紀前二六四—三年であるから年代錄に記載の年數を加へると西紀前の年次が判る)

從つてデルプホイの參政官ギュリダの年次は西紀前五九一—〇年となる ところが、パウサニアス[8]は「第四八回オリュムピア祭第三年(西紀前五八六—五)アムプヒクティオニア同盟は賞品を設定した」と共にこの時運動競技を創めたとある。このところパロス年代錄とは五年の開きがある。しかるに、ソロンが第一神聖戰爭を主唱したこと、またこの戰爭は少くとも西紀前五九〇年迄に終結してゐること等

を考へ合せると、パロス年代錄の記錄の方が正しい。念のためにエウセビオスの「年代錄」[9]を見ると、第一回ピュティア祭をこの時より十年若しくは十一年のちの出來事としてゐる。すなはち、第四九回オリュムピア祭第四年（西紀前五八一——〇）「メルケルテスの後、イストミア祭幷びにピュティア祭初めて擧行せらる」同じ事件が同アルメニア譯本では第五〇回第一年（西紀前五八〇—七九）の項に記されてゐる。パロス年代錄三八行にピュティア第二回祭が、西紀前五八二—一年に擧行されたといひ、パウサニアスも同樣のことを報じてゐる。後世ピンダロスの註釋家[10]（アレクサンドリア學者アリスタルコホス—ディデュモス）はこの年を以つてピュティア祭の初回年としてゐるところから考へるとエウセビオスの記錄は西紀前五八二—一年の誤記と思はれる。それ以後はオリュンピア祭第三年つまり四年目毎に擧行されることになつた。また先に述べたやうにピュティア祭がアポロンの誕生日デルプホイ暦第二月ブウカティオス月七日[11]（アテナイ暦メタゲイトニオン月）に落ちるとすれば、西紀前三三八年の名高いカイロネイアの戰は、この月（同年九月一日）[12]に決戰が行はれたことになる。元來、四大祝祭日前後は全ヘラスの休戰和平を宣するのが恒例になつてゐるが、此の年に限り異例を作り、大戰の決戰日としたことには深い意義がある。古典希臘文化を荷ふ都市國家の運命がこの一戰に賭けられたが、不幸にして破れ、戰捷後プリッポス二世はコリントスへ、この戰に參加した敵味方の全ヘラス人代表者を招いてヘラス聯盟を結成したのでめつた。史家はこれを目して希臘都市國家の崩壞といふ。一方、スパルタを除く全ヘラス聯盟々主となつたプリッポスが、先づヘラス全土の國内平和を劃し、更にヘラス人の信仰の座であるオリュムピア及びデルプホイの修復に專ら力を竭すに至つたのは當然のことであつた。

次は、「ピュティア優勝者錄」の制作年代である。前掲碑文にはカリステネスと協力して編纂し、「仍つてアリストテレス幷びにカリステネスを表彰し、戴冠すること」とある。この依囑を受けたのが西紀三三八年の春であつたことは先に述べたが、その四年後の西紀前三三四年の春には、こゝに記載のカリステネスは、アレクサンドロスのペルシ

ア東征の一幕僚となつて従軍してゐる。従つて、合作はこの時以前でなければならぬ。一般に功勞者を表彰するのは祝祭を選ぶのがヘラスの例であつたから、この場合も次の祝祭日である西紀前三三四年八月十八日より初まるピュティア祭に於いてアリストテレスのみが戴冠の榮譽を受けたものと見られる。F. Hemolle はこの碑文の年代を西紀前三三四—三——三三二—一年の間と考へてゐるが、それは以上のやうな理由からデルプホイの參政官ルキアノス（西紀前三三四—三）時代と考へる方がよくはないかと思ふ。

また、この「優勝者錄」と關聯して他の重要な碑文の記載がある。デルプホイの參政官カプヒオス（西紀前三三一—〇）秋の支拂勘定書に

（九—一〇行）「デルプホイディノマコホスにピュティア優勝者錄の刻文に二ムナ」[13]

同春の勘定書に

（四二—四三行）「神聖委員の命によりディノマコホスにピュティア優勝者錄の刻文に二ムナ」[14]

また、參政官テオン（西紀前三二八）秋の勘定書に

（四一—西二行）「ディノマコスにピュティア優勝者錄並びに隣記十名のため文字彫刻に……」[15]

の記錄から、優勝者錄を碑面に刻むことは、デルプホイ市選出の神聖委員ディノマコホス（西紀前三三一—〇）[16]所管の下にあつたことが明白である。そして、勘定書から見ると、それは西紀前三三四年春から三年後の繼續工事となつてゐる。

さて、以上述べたことを要約すると、アリストテレスの著「ピュティア優勝者錄」は、その甥である史家カリステネスの協力を得て成つたものにして、内容は音樂幷びに運動競技の優勝者名を錄し、西紀前五九〇年のピュティア祭、デルプホイの參政官ギュリダの時代、時の競技主宰者はテッサリのエウリュロコホス、第二回祝祭はそれより八年後西紀前五八二—一年に擧行したことを記し、爾後恒例通り四年目毎に行はれた祝祭の優勝者を錄して、西紀前三三八年の祝祭主宰者マケドニア王プヒリッポスの時迄を誌したものと考へるのである。

「註」① H. Pomrow はこの復原に反對して「音樂篇優勝者錄」に

音樂に關する競技「ピュティコス誌」に運動競技の優勝者錄があつたやうに解釋してゐる。Ditt.³ 275 註釋參照。

② Strab. 9, 421.

③ Paus. X 7.

④ F. Susemihl, Gesch. d. gr. Lit. in Alexandrinerzeit. I 1891, 532; H. Diels. op. cit. 79.

⑤ F. Jacoby. F. Gr. Hist. II 1929, Nr. 131. Menaichmos von Sicyon. スキダスによると「スキユオン人、アルキビオス又はアルキビアデスの子、史家、後繼時代に生る。アレクサンドロス以後のマケドニア史を著はせり」F. Jacoby はアレクサンドロスと同時代と見てゐる。この外「ピュティア誌」「藝術家について」の著がある。

⑥ Argum. Pind. Pyth. I 1. (Drachmann, 1910 II 4)

⑦ F. Gr. Hist. II B 1929, Nr. 239. (IG XII 5, 444)

⑧ Paus. X 7, 4.

⑨ Euseb. Kan. Abr. 1436 Ol. 49, 4 (1435 FM) J. Kaerst, Chronik d. Euseb. 1911, 187.

⑩ ピンダロスの第九オリユムピア頌歌の註釋書 Schol. Pind. Ol. IX 17, 18. の解釋によつてピュティア祭の第一回年次が決定せられるのであるが、そしてこれは久しい間學界の論爭問題であつた。ところが P. Oxy 222「オリユムピア優勝者錄」の斷片の發見によつて、アレクサンドリアの學者たちは西紀前五八二—一年を初回としてゐたことが判明した。

⑪ Ditt.³ 145 (IG II² 1127) Schol. Pind. Pyth. 1; Plut. de El. apud. Delph. 17; Quaest. conv. IX 3, 1; Hesiod. 71ff, F. K. Ginzel, Handb. d. Math. u. Tech. Chronol. II 1914, 359.

⑫ Plut. Camil. C. 19.

⑬ Ditt.³ 251 M.

⑭ Ditt.³ 252 N.

⑮ Ditt.³ 253 R.

⑯ 同じデイノマコホスへ支拂勘定書（西紀前三三八）「ピュティアに於ける工事に對し、デイノマコホスに通路に面する石碑百に對し、一石碑毎に二スタテエル、百にて五ムナニナ、五スタテエル（以下欠）」があつて、常時に於ける碑面の時價を知ることが出來る。Ditt.³ 250 D 48ff. また西紀前三三五年の碑文に「デイノマコホスに文字彫刻のため、百字四オボロイの割で、合計二ムナ七スタテエルを支拂ふ」Ditt.³ 251 II Col Ⅲ 24ff. これをアイギナ貨で算定すると、二ムナは二万一千字となる。

四、デルプホイの碑文破毀とアリストテレスの最後

西紀前三二三年ダイシオス月二十八日（六月十三日）、齡

三十三歳のアレクサンドロスは、ペルシア東征、印度遠征の大事業を完了して、一方に次の戰征への計畫中、バビュロンに病歿した。彼の訃報が初めアテナイに達した時は、何人も容易に信じなかつたとある。[1] 病歿の確報が傳はると、アテナイの反マケドニア黨は、全ヘラスに呼應して、マケドニア政權轉覆の行動にうつつた。親マケドニア黨の領袖と目されてゐるデマデス、ピュテアス、カハリメドン等はそれぞれ市民會に於いて反對黨の糺彈を受け、[2] 一方、マケドニア黨人の巢窟と目されてゐるリュケイオン學園にも彈壓の手が延び、危險は學長アリストテレスの身邊にまで及ぶに至つた。アリストアレス彈劾の內容はヘルミアスの「像と碑銘」[3] をデルプホイのアポロンへ奉獻し、彼の「德の頌歌」を作つたいふ瀆神罪にあつた。彈提劾案者はエリュウシス神殿の神官エウリュメドンとイソクラテス學派の門下史家エプホロスの子デモプヒロスであつた。そこで彼は密かにアテナイを逃れて、當時なほマケドニア國の勢力の及ぶエウボエアのカハルキスに退いたのであつた。傳ふるところでは、ソクラテスの場合のごとく

「アテナイ人をして再び哲學に對して罪を犯さゞらしめむがために」

とある。

いまアポロドロスの「年代錄」中、このところをよく見ると

「そして第百四回オリュムピア祭第三年カハルキスに退き六十三歳をもつて病歿せり、同年デモステネスはカラウレアにて死す、ピュロクレスがアテナイ參政官の時」Diog. Laert. V. 10.

「(アテナイ滯在第十三年にアレクサンドロスの死後(アテナイ)參政官ケプヒソドロスの時、カハルキスに退き病によりて歿す、享年六十三」 Dionys. Hal. ad Amm. I. 5.

アリストテレスのアテナイ退去は、ラミア戰の發端の年代研究と關聯して少からず重要である。そこでこの二つの斷片から、次のやうなことが言へる。

「アリストテレスはアテナイ參政官ケプヒソドロスの時カハルキスに退去し、同ピュロクレオスの時同處にて病歿した。享年六十三」

更にこゝに出て來る二人の參政官の任期を調べて見るとケプヒソドロス、西紀前三二三年七月十二日—三二二年七月

三十日
ヒュロクレオス、西紀前三二二年七月三十一日―三二一年七月十八日

この時、アテナイの主戰派の急先鋒レオステネス將軍の勸說に應じて、テッサリア、アイトリア、ボイオティア、ロクリア及びプホキア等先のアムプヒクテュオニア同盟の大部分が反マケドニア聯合軍に加入した。[4] 當時に於けるデルプホイの地位を知るべき參考史料にアテナイとプホキアの同盟條約斷片がある。[5]

（一―六行）「ケプヒソドロス參政官の時……イドス族第三當番（プリュタネア）、アロペケ區のピュトドロスの子エウクレス書記官たり、ピュアノクシアン月十八日すなはち、本當番（プリュタネア）の第三十六日

（六―一三行）市民會決議、評議會にて既に決議せられたる……市民會にて決議す、メリテ區の……提案す、プホキア派遣のアスクレピオドロス並びに……プオキアに對して……（以下斷片）」

アテナイ曆ピュアノクシア月十八日は、第三當番（プリュタネア）第三十六日で第一、第二當番の碑文が出土してゐるから、日次を正確に算定出來るが、それは西紀前三二二年十月二十五日に當る。するとプホキアは十月二十五日以前、アテナイの勸告を受け、使節アスクレピオドロス等を遣はして、反マケドニア戰備の交渉をなさしめ、この時同盟條約が成立したものと見られる。故にこの提案が通過した時には一切は表面花し、戰機は可成りの程度に熟してゐたと言へる。疑もなく、アテナイはマケドニア黨にとつて安住の地ではなかつた。故に、アリストテレスのアテナイ撤去は、遲くともこの時以前とせねばならぬ。明白に言へることは、ヒュロクレスの參政官就任時七月三十一日より十月二十五日の間となる。バビュロンよりアレクサンドロスの訃報がアテナイに到着した時期、ここの間の距離約二二〇〇粁、それから一ケ月半乃至二ケ月間を要するものとして、それは八月の中頃となり、アリストテレスのアテナイ退出はその後一ケ月程の間といふことになる。

さて、ヘラスの自由と自治回復の戰、いふところのラミア戰に卷き込まれたデルプホイは、翌の日「ピュティア優勝者錄」編纂の功により、決議してこの哲學者たちに附與

した榮譽を剝奪した。このことを後世の史家アイリアノスは次のやうに傳へてゐる。(6)

「アリストテレスはニコマコホスの子にして賢人とせられてゐる。嘗てデルプホイにて決議して彼に與へられた榮譽を何人かゞ彼から褫奪した時、アンティパトロスに書を寄せて次のやうに言つた。デルプホイにて決議して余に授與せしものに關し、今それらを褫奪されしが、余は斯く感じる。すなはち、これらにつき、さして心を煩はさずとも雖も、全く無關心たり難し」

とある。いふところの榮譽は、プヒリッポス及その頃の慣例からすると、國賓、市民權、治外法權、公役貢稅免除權等の授與であるが、恐らく前揭のアリストテレス表彰碑文の末尾には、これに關するデルプホイの決議文が附記されてゐたものと思はれる。それがラミア戰が始るや同時に破壞せられ、後年デルプホイの發掘に際してその一部の斷片が井中から發見せられたのである。

當時マケドニア國の攝政にして永年の友人であつたアンティパトロスに右のやうな書簡を送つたアリストテレスは、翌三二二年の初め靜かに隱棲のカルキスに逝いたのであつた。そして、死後彼の遺言書には「アンティパトロスを一切のまた常時の遺言執行人」(7)と指名してあつた。

デルプホイのアリストテレス碑文は、アリストテレス傳記研究上、現存する唯一の同時代考古資料として得難い價値がある。この碑文發見の結果、少くとも彼の著「ピュティア優勝者錄」の制作年次が比較的明白になつた。更にこれを中心にアリストテレスの歷史的著述の制作年次の確定にある確證を齎らせることが出來る。例へばこれと同じき類に屬し、後世へ大きな影響を與へてゐる「オリュムピア優勝者錄一卷」(ディオゲケネス・ラエルテオス著作目錄第一三〇書目)「デュオニュシア優勝者錄一卷」(同第一三五書目)「上演目錄(ダスカリアイ)(アテナイ)一卷」(同第一三七書目)の名が傳へられてゐるが、前者はカイロネイア戰以後オリュムポスに於けるプヒリッペイオン(プヒリッポス殿)の建立と關聯して考へられ、後二者はアテナイ發掘の「上演目錄」(8)碑文の最終年次が西紀前三二八年を記錄し、これはアリストテレスが著はした同書を底本として刻文したものであると考へられて

ゐることより推して、ピュティア優勝者錄と一貫した、そして相近い年代の著作であることが窺はれる。その上「政治學」の內容が西紀前三三六年以後の記錄に觸れてゐない事實　并びに「アテナイ人の國制」が西紀前三二六年以後の作ではなからうと推定されてゐること等を考へ合はせるべきである　就中、本碑文の發見によつて、最も明白になつたことは、アリストテレスの著述といはれるものゝうちには、ミエザ并びにリケィオン學園の研究所に於いて、この哲學者の指導のもとに多くの門下生がそれぞれ專門の部門に參加して個々の研究を進め、これに協力して成つたものもあることが證せられたことである。

「註」① Plut. Phoc. c 22.

② Diod. 18, 18; Plut. Demosth. C. 26. Suid. Pytheas.

③ W. D. Ross. Aristotele.² 1930, 6 ff.

④ Diod. 17. 111; 18. 9. Plut. Phoc. c 23; Paus. 1, 25; Just. 13. 5, 9 ff.

⑤ IG II² 367, Cf. IG II² 365, 366.

⑥ Aelian. v h. 14, 1 (Rose frg. 666)

⑦ Diog. Laert. V 11.

③ Ditt³ 1078 (Michel 879) A. Wilhelm, Urkunden dramatischer Aufführungen in Athen. 1906. 6—33. E. Drerup. Ein athenisches Proxenice-dekret fuer Aristoteles. Athen. Mitteil. 23. 1898, 369fr. にサン・マルコ本の傳記、ラテン譯、アラビア譯のアリストテレス傳を根據にアテナイの碑文を補つて、アリストテレスをアテナイの國賓とする決議文を復原して紹介してゐる。

（一九四六・七・二五　故山にて改訂稿完了）